

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520774

研究課題名（和文） 海域アジアにおける出土銭貨の考古学的研究

研究課題名（英文） Archaeological research of unearthed coins in Maritime Asia.

研究代表者

三宅 俊彦（MIYAKE TOSHIHIKO）

専修大学・文学部・兼任講師

研究者番号：90424324

研究成果の概要（和文）：本研究は、海域アジアにおける、中世から近世にかけての銭貨流通を解明するための考古学研究である。3年間にわたり、ベトナムとインドネシアで出土銭の調査を行った。その結果、これらの地域では中国銭が主体となって流通していたが、ほかにベトナムや日本の銭貨など、様々な地域で鑄造された銭貨が含まれていることを確認した。これらの成果は、海域アジアの銭貨流通の状況を、考古学調査により具体的に明らかにしたものと評価できる。

研究成果の概要（英文）：This is an archaeological study to clarify coin circulation from the medieval period to the early modern period in Maritime Asia. For a period of three years, coins excavated in Vietnam and Indonesia were examined. As a result, it was confirmed that while the majority of coins were Chinese, coins minted in other areas such as Vietnam and Japan were also involved. These results can be said to cast real light, from an archaeological investigation, on coin circulation in Maritime Asia.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：アジア考古学・中近世・貨幣

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内外の状況

日本の中近世に相当する時期、東アジアで

は広く銅銭（銭貨）が流通しており、考古資料としての出土銭（一括出土銭）も多数存在する。これら、日本・中国を含む海域アジア

における出土銭貨の考古学的研究は、緒についたばかりの新しい研究分野である。

日本では、近年当該分野の研究は急速に進展しており、一定の成果が蓄積されている。

また中国では出土銭貨に対する考古学研究はほとんど行われておらず、特に宋代以降の出土銭の様相は、不明な点が多かった。

そのため報告者は、在外研究の機会（平成13年度海外特別研究員）を利用し、中国の一括出土銭の事例を収集し、拙著『中国の埋められた銭貨』（同成社 2005）を発表した。その結果、中国の出土銭の様相が明らかとなり、日本との比較研究も可能となった。

また報告者はモンゴルや沿海州などの出土銭についても調査を進め、東アジアの銭貨流通の様相は解明されつつある。

（2）これまでの調査

こうした研究の進展を受け、貨幣経済が盛んであった海域アジア地域においても、出土銭貨の調査・研究を行い、考古資料から銭貨流通を解明することが重要となってきた。

そのため、報告者を研究代表として平成19年度科学研究費補助金・基盤研究（C）「ベトナムにおける出土銭貨の考古学的研究」を申請し、採択されたことを機に2年間にわたるベトナム北部での調査を行った。

この調査では3点の一括出土銭資料を調査し、大きな成果を上げることができた。

2. 研究の目的

（1）現地調査

研究の目的は、海域アジアにおける銭貨流通を考古学的に解明することである。そのため、本科研ではベトナムとインドネシアにおいて出土銭の調査を行うことにした。

ベトナムではすでに、ハノイ周辺から出土した一括出土銭の資料を入手し、調査に取りかかっている。それらは合計6点あり、それぞれ1～6号資料と呼んでいる。その内、1～3号資料までは以前の科研費にて調査を終えている。本科研では残りの4～6号資料を調査し、他地域の資料と比較可能な形でデータ化することが目的である。

インドネシアでは、まず情報の収集から行うことになる。これまでの発掘調査などで、多くの銭貨が出土しているが、それらが海外の研究者も利用可能な形で情報がもたらされてはならず、主要な遺跡からの出土銭の情報を集め、調査可能な資料を探すことから始める。

（2）流通銭貨の解明

上記調査を経て、海域アジアにおける銭貨流通の歴史の変遷を考古学的にしたい。

これまでの出土銭研究は、日本や中国、あるいは北東アジアなどで、一定の進展を見て

いる。今回の科研により、ベトナムやインドネシアなど、海域アジアの出土銭貨の様相が明らかとなれば、それぞれの地域の出土銭を比較し、両者の共通性と差異を抽出でき、その歴史的背景や、流通銭貨の歴史の変遷を東アジア規模で解明できると考える。

最終的には、東アジアにおける「貨幣考古学」という、新しい研究分野の確立を目指したい。

3. 研究の方法

（1）調査地の選定

調査地は、歴史的に銭貨流通が盛んで、出土銭が発見されている地域とし、具体的にはベトナムとインドネシアを選定した。

ベトナムは、古くは中国に支配された北属時代に、中国銭が流通していた。また、漢の墓に大量の五銖銭が副葬され、唐の開元通寶を主体とする一括出土銭の発見例が報告されているなど、考古資料の発見も多い。

さらに独立を果たした10世紀以降は、ベトナム独自の銭貨を発行するなど、貨幣経済を指向している。中世には中国の銭貨が流入、近世には自国の通貨を発行しながらも、中国や日本からも銭貨の輸入があった。

こうした状況を踏まえ、ベトナムにおいて出土銭を考古学的に調査し、具体的な貨幣流通の状況を明らかにすることが重要であると考え、ハノイ国家大学のグエン・ヴァン・キム副学長と協議の上、ベトナム北部の一括出土銭の調査を行うこととした。

インドネシアも、中国の銭貨が大量に流通していた地域である。13世紀にジャワ東部に建てられたマジャパイト王国では、中国銭貨が流通していたことが分かっている。また、16世紀にはジャワのバンテンにおいて、中国の福建から銭貨がもたらされ、流通していたことが、オランダ人の記録に記されている。

以上のように、インドネシアにおいて中国銭貨が流通していたことは明らかであるが、これまで出土銭に関する考古学的論考は少なく、具体的な状況の把握が必要であった。そのため本科研では、インドネシア共和国文化観光省国立考古学研究開発センターのソニー・ウィビソノ氏と協議の上、ジャワ島とバリ島にて調査を行うこととなった。

（2）調査方法

調査の方法は、現地で発見されている一括出土銭および個別発見貨を、比較可能な資料として、データ化することである。

具体的には容器の実測・写真撮影、銭貨のクリーニング・判読（分類）などを行い、集計表を作成する。さらに状態の良いものを選んで写真・拓本・法量の計測などを行い、資料化する。

4. 研究成果

(1) ベトナムでの調査

①4号資料

本科研では、我々が4～6号資料と名付けた一括出土銭の資料を調査した。いずれもベトナム北部で出土したものである。

4号資料は、口縁部が一部欠損した高さ約24cmの筒型容器に、3,535枚の銭貨が入っていた。最古銭は前漢・五銖銭(B.C.118年初鑄)で、最新銭は明・大中通寶(1361年初鑄)であった。ベトナムの2枚の天福鎮寶を除き、他はすべて中国銭であった。中でも北宋銭が多く、全体の約87%を占める。

②5号資料

5号資料は底部を欠損している壺に入れられていた。残存率は約80%で、口縁部径12.0～13.0cm、器高は27.5cmである。銭貨は錆着して塊になっている約5kgを現状保存することとし、その他のものを調査した。

調査した総数は4,409枚であり、最古銭は唐・開元通寶(621年初鑄)、最新銭は黎・洪順通寶(1509年初鑄)であった。この一括出土銭の特徴は、官鑄の「制銭」ではなく、民間で鑄造した「私鑄銭」が約半数を占めていることにあり、それらは皆中国の北宋銭を模している。残りは中国の銭貨が主体であり、特に北宋銭が多く、制銭の内約75%を占める。その他、ベトナム黎朝の銭貨も147枚(制銭の約7.5%)含まれていた。

③6号資料

6号資料は発見時に容器はみられなかったが、銭貨が半球状に錆着していたことから、外容器を伴って埋められていたと考えられる。銭貨は総数1,727枚であり、最古銭は唐・開元通寶、最新銭は黎・景統通寶(1498年初鑄)であった。中国銭を主体としており、全体の約88%を占める。中でも北宋銭が多く、約79%であった。ベトナムの銭貨は皆黎朝のもので、33枚(約2%)であった。

④調査成果

最新銭の抽出により、推定される埋められた時期は、4号資料が14世紀後半、5号資料が16世紀前半、6号資料が16世紀初めと推定される。4号と6号資料は中国銭が主体となっていたことから、14世紀前半～15世紀にかけては、中国の北宋銭を中心とする渡来銭が銭貨流通の根幹を担っていたことが明らかとなった。

また16世紀前半以降の5号資料では、半数は北宋銭を中心とした中国の制銭であったが、残りは私鑄銭であり、貨幣経済の混乱が看取される。しかし、それらの私鑄銭も北宋の銭銘を模しており、流通銭貨には中国銭の銘文が必要であったことをうかがわせる。

4号と6号資料の主体を占める中国銭について、その種類と比率を導きだし、中国・日本の一括出土銭と比較して見ると、ほぼ同じ

ような割合を示すことが判明した(図1)。

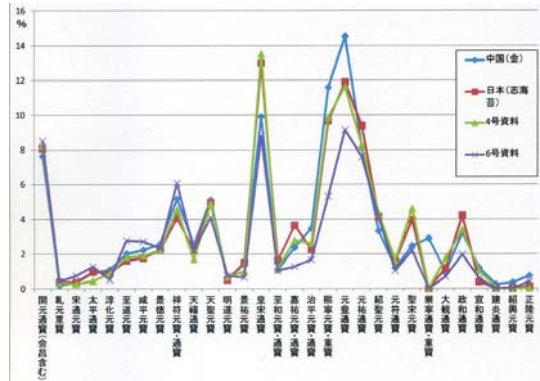


図1 4,6号資料と日中の銭種組成の比較

このことから、中国から流出した北宋銭を中心とする銭貨は、中国国内の銭種組成のまま、選択や選別がなされることなく、日本やベトナムへもたらされたことが分かる。

(2) インドネシアでの調査

①2010年度

2011年2月にジャワ島とバリ島にて現地に収蔵されている出土銭を見学した。ジャワ島ではバンテンラマ遺跡博物館、国立博物館、東部ジャワ文化財管理事務所の出土銭資料を、バリ島では考古センター・バリ事務所、バリ島等文化財管理事務所にて、収蔵されている遺跡出土の銭貨を見学した。

見学した銭貨の中で、東部ジャワから出土したシガバブ(Ngabab)の一括出土銭1,036枚は、開元通寶から永樂通寶までの中国銭が埋められており、北宋銭が主体であった。

またバリ島で調査した銭貨には、中国の清朝銭が多く認められたが、その鑄造局は北京のものと雲南のものが見られた。さらにバリ島では日本の寛永通寶やベトナムで鑄造された銭貨なども出土しており、中国だけでなく海域アジアの広い地域から銭貨が流入していたことが明らかとなった。

②2011年度

2012年2月にバリ島において、出土銭の調査を行った。調査した資料は、バリ島中央部の外輪山に位置するレ・グンディ・クブサリヤ寺院で発見されたものである。

調査の対象となった出土銭は2008年に寺院の改修中に発見されたもので、現地での聞き取り調査により一括して出土したのではなく、数カ所から発見されたものを集めたものである。過去に複数回行われた祭祀儀礼に使用されたものと推測される。調査時点では4,965枚が現存していた。

調査の結果、銭貨は中国銭が主体となっており、中でも清朝銭が4,470枚と約90%を占めていた。中国の銭貨は他に唐・開元通寶14枚、北宋銭118枚、明銭20枚などがあつた。このことから、バリ島へは中国から銭貨がも

たらされたことが明らかとなった。また日本の寛永通寶 63 枚、長崎貿易錢（元豊通寶）5 枚など日本の錢貨や、ベトナム中部で鑄造された私鑄錢 227 枚などが発見されており、日本や東南アジアからの流入も確認できた。

③調査成果

2010 年度に調査した、東部ジャワのンガバ遺跡出土の一括出土錢を、ベトナムと日本のものと錢種・比率を比較すると、三者には若干の差異は認められるものの、比率はおおむね一致した（図 2）。このことから、13 世紀以降インドネシアに流出した中国の錢貨も、基本的にそのまま使用されていたことが明らかとなった。

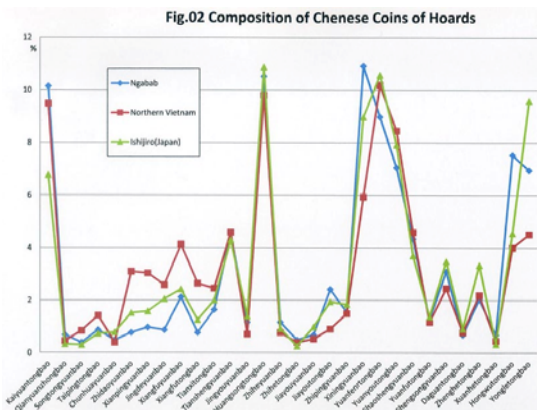


図 2 バリ島とベトナム・日本の錢種組成

また、清朝錢も、インドネシアから数多く出土している。それらの鑄造地を明らかにするため、乾隆通寶を抜き出して調査した。その結果、バリの遺跡出土のものとクブサリヤ寺院のものは半数以上が北京の戸部寶泉局・工部寶源局発行のもので、雲南鑄造のものがそれに次いで多かった（図 3, 4）。

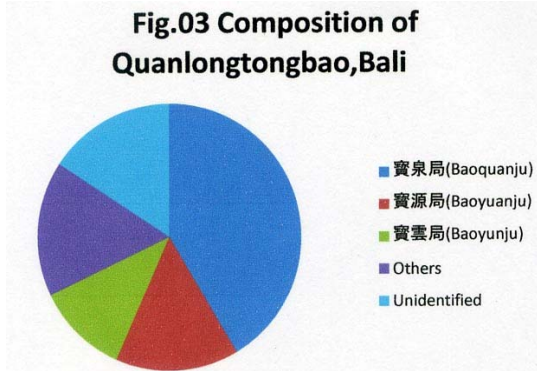


図 3 バリ島の遺跡出土の乾隆通寶

一方、ベトナム北部のものは、圧倒的に雲南で鑄造されたものが多く、両者の違いが浮き彫りとなった（図 5）。これは清朝中国では地域ごとに流通する錢貨の組成が異なっており、ベトナムとインドネシアでは、中国からの流入ルートが異なっていたことを示している。ベトナム北部への流入ルートは雲南

と直接繋がるホン河を利用した内陸ルートが想定できるが、インドネシアへの流入ルートは、中国南部の錢貨流通の状況が不明のため、今後の課題としたい。

04 Composition of Quanlongtongbao, Kubusalya, Barei Kubusalya, Bali

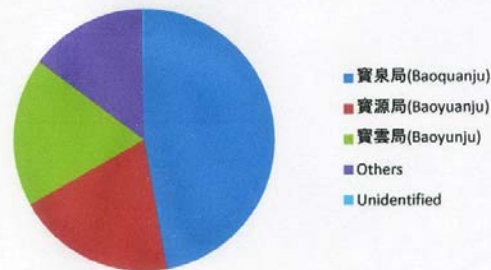


図 4 バリ島のクブサリヤ出土の乾隆通寶

Fig.05 Composition of Quanlongtongbao, Northern Vietnam

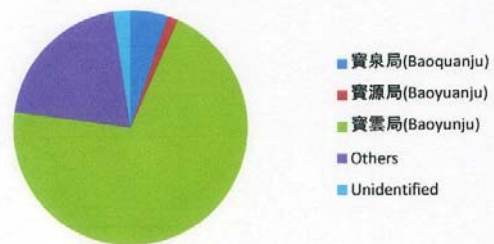


図 5 ベトナム北部一括出土錢の乾隆通寶

(3) 海域アジアの錢貨流通の復元

本科研の調査により、海域アジアの錢貨流通の状況が、考古資料により明らかにすることができた。

海域アジアを含む東アジア地域では、中世には日本・ベトナム・インドネシアともに、中国からの渡来錢が大量に流入し、貨幣經濟の根幹を担っていた。

また近世には、日本とベトナムでは自国通貨を鑄造史、基準通貨としていたが、ベトナムでは清朝錢や日本錢もまた一定程度流通していた。さらにインドネシアでは、清朝錢・日本錢・ベトナム錢が、複合して流通していた様相が明らかとなった。

この研究テーマは始まったばかりであり、今後さらに調査を継続し、より詳細な研究へと深化させていく必要がある。

具体的には、ベトナム中部など、独自に錢貨を鑄造していた地域の調査がまだ不十分であり、今後調査を進めていきたい。また、中国本土の一括出土錢の調査は十分でなく、特に明代・清代のものはほとんど情報がない。この方面でも調査を行うことが求められる。

さらに将来的には海域アジアだけでなく、北アジアや中央アジアへも視野を広げ、東ア

ジア全体の錢貨流通の復元を行って行くことができると考えている。最終的には、東アジアにおける「貨幣考古学」の構築を目指したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 三宅俊彦、出土錢研究の現在、考古学ジャーナル、査読無し、626、2012、p. 3~4

[学会発表] (計2件)

- ① 三宅俊彦、中国的窖藏錢以及東亜で流通錢幣、国際討論会“中国貨幣歴史再考察”、2009年12月15日、東京大学
② 三宅俊彦、ベトナム北部の一括出土錢の調査、日本ベトナム研究者会議、2009年10月31日、東京大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三宅 俊彦 (MIYAKE TOSHIHIKO)
専修大学・文学部・兼任講師
研究者番号：90424324

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

櫻木 晋一 (SAKURAKI SHINICHI)
下関市立大学・経済学部・教授
研究者番号：00259681

菊地 誠一 (KIKUCHI SEIICHI)
昭和女子大学・生活機構研究科・教授
研究者番号：40327953

(4) 研究協力者

坂井 隆 (SAKAI TAKASHI)
國立臺灣大學・藝術史研究所・副教授